

The Present Situation and Tasks of International Exchange Activity in Schools of Nursing: Visits of the Students and Faculty Members of Washburn University School of Nursing to Fukuoka University (the Third Report)

Tamami UENO^{1,2)}, Kumi ARITA^{1,2)}, Yoko ISHIBASHI^{1,2)},
Tomoko OHSHIRO^{1,2)}, Satoshi IKEDA^{1,2)}, Motomu KUROKI^{1,2)},
Ikuko MIYABAYASHI^{1,2)}

¹⁾ *Committee of International Affairs 2015, School of Nursing, Faculty of Medicine, Fukuoka University*

²⁾ *School of Nursing, Faculty of Medicine, Fukuoka University*

Abstract

In 2012, the School of Nursing, in the Faculty of Medicine of Fukuoka University started to prepare for an international exchange program with Washburn University School of Nursing (WUSN) in the United States as an international exchange activity. A total of 38 students and 8 faculty members have been sent to WUSN to learning advanced nursing skills. Both schools started talks to promote mutual exchanges in 2013 and the dean of the School of Nursing and the director of International Programs visited Fukuoka University in 2014. It was then decided that mutual exchanges between the schools should be started from 2015. In January 2016 3 faculty members and 6 students visited Fukuoka University from WUSN in the 1st international exchange program. In this program they were taken on a tour of the hospitals and medical facilities and enjoyed homestays in accordance with the goal of a WUSN class entitled, "Nursing in Japan". Through this program they could gain a greater understanding about medical care and nursing in Japan and about Japanese culture and history. Human interactions also deepened through the mutual exchanges of faculty members and students. It is expected that the exchange program will be continued for many years to come when the necessary adjustments are made to satisfy people at WUSN.

Key words: International Educational Exchange, Students, Faculty, United States, Nursing, Future Directions

看護学科における国際交流活動の現状と課題 －第3報 米国ウォッシュバン大学看護学部との国際交流－

上野 珠未^{1,2)} 有田 久美^{1,2)} 石橋 曜子^{1,2)}
大城 知子^{1,2)} 池田 智^{1,2)} 黒木 求^{1,2)}
宮林 郁子^{1,2)}

¹⁾ 福岡大学医学部看護学科 平成 27 年度国際交流委員

²⁾ 福岡大学医学部看護学科

要旨：福岡大学医学部看護学科では、国際交流活動のひとつとして、2012年より米国ウォッシュバン大学の看護学部と国際交流プログラムを開始した。これまでの4年間に計38名の学生と8名の教員を派遣し、

米国の先進の看護を学んできた。2013年からは相互交流推進のため、ウォッシュバン大学と調整を開始し、2014年にはウォッシュバン大学看護学部の学部長、国際センター長が来日した。視察後に研修内容について協議した結果、2015年度から相互交流の開始が決定した。2016年1月にはウォッシュバン大学看護学部から3名の看護学部教員と6名の学生を迎え、第1回目の国際交流プログラムを実施した。ウォッシュバン大学の授業科目「Nursing in Japan」の目的を踏まえ、病院見学や施設見学、ホームステイなどのプログラムを通して、研修生は日本における医療や看護だけでなく、日本の文化や歴史について学びを深めることができた。また、看護学科においても、教員・学生との相互交流を通じ、人的交流が深まった。この研修がウォッシュバン大学の期待するプログラムとなるよう、双方で調整を重ね、今後長きにわたり交流が続いていくことが望まれる。

キーワード：国際交流，米国，看護学生，看護教員，看護学科

はじめに

文部科学省は、グローバル化時代において我が国が発展するために、「知の国際化」を支えるための多様な人材育成を推進しており、若者の内向き志向の打破や学校の国際化等について提言している。「知の国際化」とは、我が国が培ってきた教育、科学技術、文化等の力を広く国際社会に発信していくことであり、国際社会で活躍できる人材育成と、海外の優秀な学生や研究者の受け入れ等、双方の人的交流を活発にしていくことが我が国の発展において不可欠である¹⁾。

福岡大学では、「グローバル人材の育成」に対するニーズに応え、2013年より「グローバル人材育成推進事業」の一環として、グローバル人材の育成を目的とした「グローバル・アクティブプログラム（以下GAPとする）」という新たな教育プログラムを設置している。看護分野においても、グローバルな視野を持った人材の育成が求められており、我が国だけでなく、世界的に看護が発展していくためには互いに交流を深め、双方の教育や文化などを学ぶことが必要不可欠である。

福岡大学医学部看護学科国際交流委員会では、2007年の開設時より、韓国の啓明大学看護学部と国際交流協定を締結し相互交流を深め、その成果については第1報²⁾で報告した。また、2012年度からはウォッシュバン大学看護学部との国際交流プログラムを開始し4年目を迎え、成果については第2報³⁾で報告した。これまで米国での看護研究へ参加するのみの一方通行の交流であったが、この3年間でウォッシュバン大学での国際交流プログラムも軌道に乗り、2015年度からはウォッシュバン大学看護学部教員と学生を受け入れ、当看護学科で看護研修を実施した。

そこで今回は、この看護研修の実施を通して、その内容がウォッシュバン大学の研修目的に沿ったものであったか、また、交流活動を通して我々看護学科の国際的視

野は深まったかどうかについて国際交流委員の立場から報告し、今後のプログラムの検討や双方の交流のあり方について課題を明らかにする。

内容・成果

1. ウォッシュバン大学研修受け入れまでの経過

福岡大学医学部看護学科とウォッシュバン大学看護学部は2012年より国際交流プログラムを開始し、4年間に計38名の看護学生と8名の教員を派遣した。2014年9月にはウォッシュバン大学看護学部長と看護学部教員2名、国際交流センター長が来学し、双方向の研修が可能かどうか視察を行い、協議した。2015年、当看護学科での研修実施が決定し、ウォッシュバン大学看護学部ではこの研修のための授業科目「Nursing in Japan」が新設された。研修内容については来日前にSkypeやメールを利用し、双方の国際交流委員間で検討を行った。そして今回、2016年1月に第1回目の看護研修プログラムを実施した。

2. ウォッシュバン大学看護学部の概要

ウォッシュバン大学は、米国のほぼ中央に位置する、カンザス州の州都トピカに1874年に創設された公立大学である。約7000人の学生が在籍し200のアカデミックプログラムを有している。看護学部は1974年に新設され、これまで約3000人の看護学士が卒業し、学士課程のほか修士、博士課程もある。ウォッシュバン大学とは、福岡大学創設時より協定を結んでおり、全学部学生を対象として毎年海外研修生を派遣している。

3. ウォッシュバン大学研修の概要

「Nursing in Japan」におけるコース詳細や成果について以下に記す。（教育目的、行動計画については英文を翻訳）

- 1) 授業科目名：Nursing in Japan
- 2) 単位数：2単位
- 3) 担当教員：引率教員3名
- 4) 教育目的
 - (1) 日本の看護学校での活動に参加し急性期と介護ケア提供の場を訪問して、日本におけるヘルスケア提供システムについて学生の理解を促す。
 - (2) 日本の医療制度における看護師の役割を理解するために、日本の様々な医療現場で経験を積む。
 - (3) 日本の歴史や地理、文化について様々な経験を積む。
- 5) 行動目標
 - (1) 患者のケアにおける計画・調整について、日本の看護師の役割を説明する。
 - (2) 日本における健康増進と疾病予防の取り組みを説明する。
 - (3) 日本の急性期・長期療養ケアの現場における医療介入を明らかにする。
 - (4) 日本の看護実践と医療提供に影響を与えている経済や政治、社会及び歴史について説明する。
 - (5) 日本と米国の人々の、医療ニーズの類似点と違いを分析する。
 - (6) 文化交流体験の間、その文化に適したコミュニケーションを実践する。
- 6) 研修の費用

授業料に関しては、ウォッシュバン大学が半額負担し、交通費は自費である。日本での研修期間中の宿泊費、飲食費に関しては実費を徴収し、終了時会計を報告した。

4. ウォッシュバン大学研修の実際

- 1) 研修期間：2016年1月5日（火曜）～1月14日（木曜）。10日間のうち1日は東京観光であった。また、実際は飛行機遅延のため1月6日午後からの研修開始となった。
- 2) 研修参加者：ウォッシュバン大学看護学部学生6名（女子5名、男子1名）、教員3名であった。
- 3) 研修担当：7名で構成された看護学科国際交流委員。
- 4) 研修プログラムの計画

研修の実施にあたり、4月の委員会発足後、研修計画を立案し、双方の国際交流委員でプログラムの検討を重ね実施した。また、国際交流委員が中心となり、研修の準備、受け入れ、評価などを行った。

今回の研修プログラム（表1）では、ウォッシュバン大学側の研修目的について考慮しながら内容の検討を行い、プログラムを作成した。見学先の施設は、病院・医療福祉施設の見学やディスカッションを通して日本の看護や看護師の役割について学びを深められる

よう配慮した。大学病院の他に、高度な医療を提供する高度先進医療機関、福祉施設とも連携をとりながら在宅療養への橋渡しを行う中規模病院と、施設ケアと在宅ケアの中間的なサービスを提供する拠点として位置づけられている小規模多機能施設を選び、今日の日本が抱える課題である高齢化や脱施設化に対応するための我が国の試みについても理解できるよう工夫した。

さらに、双方の教員・学生間の交流を深めることを目的とし、ウォッシュバン大学の教員による看護学部の教育やカリキュラムに関するFD講演会の実施や、当看護学科授業科目である「国際保健看護」内でウォッシュバン大学の紹介や、研修生によるスピーチとプレゼンテーションを企画した。

その他に、日本文化や生活習慣を体験し、文化に対する理解を深めることを目的とし、研修中にホームステイを組み込んだ。また、研修中に連休が重なったため、長崎へのバスツアーを企画した。

5) 研修プログラムの実施（表1）

飛行機遅延によりウォッシュバン大学研修生と教員の到着が予定より1日遅れたため、予定していたプログラムを一部変更して研修を開始した。

大学病院見学では、小グループに分かれハートセンター、消化器センターで看護師についてシャドウイングを行い、小児医療センターや総合周産期母子医療センター、精神科病棟の見学を行った。研修生は積極的に看護師へ質問し、興味深く熱心に学んでいた。見学後のディスカッションでは、見学を行った病棟の看護師数名が参加し、通訳を通して学生の質問に答えた。研修生は、日本の医療と看護を目の当たりにし、米国と似ている部分もあると感じる一方で、日本ならではの医療や看護について興味を持ち、活発に意見交換を行うことができていた。中規模病院と小規模多機能施設の見学では、高齢者との交流を通じ、日本における認知症看護の一端を学ぶことができた。

また、FD講演会では、ウォッシュバン大学教員による看護学部のカリキュラムや看護教育等に関する講演が行われ、米国の看護学士育成にあたり、学生が履修する科目や単位数についても知ることができた。講義後は質疑応答の時間を設け、双方の看護教育の現状を語る有意義な場となった。

看護学科科目「国際保健看護」内でのウォッシュバン大学研修生によるスピーチやプレゼンテーションでは、3名の研修生が看護師を志したきっかけや今後の目標についてそれぞれ語り、1名の研修生が「Baby Boomers : A Healthcare Crisis」というテーマでプレゼンテーションを行った。続けて各グループに分かれ、研修生と共にディスカッションを行う予定であったが、授業時間の関係で実施はできなかった。学生は

表 1 研修プログラム (2015 年度)

日時		スケジュール
1/6 (水)	13:00	空港到着 / お出迎え / 福岡大学へ出発
	14:00 - 14:15	学長訪問
	14:30 - 15:30	キャンパスツアー (研修生のみ)
	15:00 - 16:30	FD 講演会
	夕方	研修生: タウンツアー (学生ボランティア企画) 教員: 夕食会
1/7 (木)	9:30	大学集合
	10:00 - 12:30	長尾病院 見学
	12:30 - 14:00	昼食
	14:40 - 16:10	国際保健看護講義
	16:30	翌日の調整
	夕方	研修生: タウンツアー (学生ボランティア企画) 教員: 夕食会
1/8 (金)	8:00	ホテルロビーに集合 (学生のみチェックアウト)
	8:45	看護学科棟に到着
	9:10 - 9:30	福岡大学病院病院長訪問
	9:30 - 10:30	オリエンテーション (看護部長より)
	10:30 - 12:00	大学病院見学実習 (ハートセンター, 消化器センター)
	12:00 - 13:00	昼食
	13:00 - 14:30	大学病院見学実習 (精神科, 小児医療センター, 周産期センター)
	14:30 - 15:30	実習のまとめ (見学病棟師長, 看護師参加)
	夕方	研修生: ホームステイ 教員: 国際交流委員会主催食事会
1/9 (土)	終日	ホームステイ
1/10 (日)	終日	ホームステイ ※夕食後ホテルへ送り届けてもらう
1/11 (月)	8:00 - 18:00	長崎バス観光 (グラバー邸, 大浦天主堂, 稲佐山展望台, 長崎平和公園)
1/12 (火)	10:30 - 12:00	学科内実習見学
	13:30 - 15:30	小規模多機能 松山見学
	17:15	Farewell Party
1/13 (水)	7:15	東京へ出発
1/14 (木)		帰国

同じ看護学生である研修生のスピーチやプレゼンテーションに興味深く聞き、様々な背景を持ちながら熱心に学習へ取り組む研修生の姿勢や、志の高さに刺激を受けていた。研修生にとっても同じ立場である看護学生に、自分の経験や目標、実践を語ることは、非常によい経験になったようであった。

また、週末を利用し 6 名の研修生が 6 家庭へ 2 泊 3 日宿泊した。ホームステイではホストファミリーとの交流だけでなく、日本の生活や文化に触れ、研修生にとって最も心に残ったプログラムとなった。

その他に、双方の交流を深めるために Welcome Lunch Party, Farewell Party, タウンツアーなどの企画・運営を行った。研修 2 日目に予定していた Welcome Lunch Party は飛行機遅延のため中止となったが、こ

れらの企画・運営には学生ボランティアが携わっていた。学生ボランティアの募集は、2015 年 12 月上旬に掲示および口頭による説明を行い、25 名の学生が集まった。さらに、2015 年度米国看護研修に参加予定であった学生 9 名も加わり、計 34 名がボランティアとして参加した。ボランティアとして参加した学生は、ウォッシュバン大学の研修生と互いに友情を育みつつ、国際交流の楽しさを味わうことが出来ていた。

5. アンケート結果

研修後、ウォッシュバン大学研修生、学生ボランティア、ホストファミリーを対象にアンケート調査を実施した。対象者へは口頭で内容を説明し、回答・提出をもって同意が得られたこととした。

1) ウォッシュバン大学研修生のアンケート結果(表2)

施設見学やホームステイ等については、学生全員が「とても良い」もしくは「良い」と回答していた。大学病院見学については、もっと質問の時間が欲しかったという意見もあった。長崎観光は好評で、原爆資料館を十分に見学する時間やお土産を買う時間が欲しかったとの意見があった。食事については、「大変よい」と回答した学生は3名いたが、一方で「あまり良くない」と回答した学生もいた。昼食に準備していたお弁当を食べずに、軽食を購入する学生の姿も見られたため、来年度は食事内容について検討する必要がある。研修の期間については、ほとんどの学生が「とても短かった」「やや短かった」と回答しており、研修スケジュールについては「やや(予定が)詰まっていた」と回答していた学生が多かった。自由に買い物を楽しむ時間や、休む時間が欲しかったという意見もあったため、来年度のスケジュールを検討する際には考慮する必要がある。

2) 学生ボランティアのアンケート結果(表3)

ボランティアに参加した理由として、「国際交流に興味があった」と回答した学生が多く、他には「英語

で話したいと思った」「米国看護研修に興味があるから」と答えた学生もおり、国際交流への関心の高さが窺えた。全体を通して良かった点については、「日本と米国の文化の違いなどを知ることができた」「看護だけでなく様々な会話ができた」「日本の文化を伝えることができた」という回答があり、タウンツアーで同じ時間を共有しながら互いの文化について語ることができたようであった。全体を通して悪かった点については、「自信がなく積極的に話せなかった」「通訳がいるわけではなかったので少し戸惑うこともあった」と、英語でのコミュニケーションに慣れておらず、十分に話ができなかったという学生もいた。他には、「ボランティアの情報掲示をもっと早めにしてほしい」と答えた学生もおり、今後は学生のスケジュールに配慮し、余裕を持って募集を行う必要がある。その他の回答として、「英語をもっと勉強したいと思った」という回答が多く、ボランティアの経験が学生にとって英語を学ぶきっかけとなり、学習意欲の向上にも繋がっているようであった。また、2015年度米国看護研修へ参加する学生の中には、「米国研修が現実味を帯びてきて頑張ろうと思った」と回答した学生もおり、

表2 ウォッシュバン大学研修生へのアンケート結果(英文を和訳し、一部抜粋)

n = 6

質問項目	大変良い	良い	普通	あまり良くない	良くない
長尾病院見学	5	1	0	0	0
病院実習	6	0	0	0	0
小規模多機能施設 松山見学	4	1	1	0	0
長崎観光	2	4	0	0	0
ホームステイ	6	0	0	0	0
ホテル	6	0	0	0	0
食事	3	1	1	1	0
期間	やや短い(3) 短い(2) 無回答(1)				
スケジュール	ややきつい(5) ちょうどよい(1)				
経験したかったこと	<ul style="list-style-type: none"> ・もっとホームステイをしたかった。 ・もし可能であれば色々な病院を訪れてみたかった。 				
意見・感想	<ul style="list-style-type: none"> ・とてもよかったが、もう少し買い物できる時間が欲しかった。 ・皆さんとても親切で、寛大で、そして思いやりが深かった。私は自分の心の一部を日本に残していきます。できればいつかその素晴らしい親切さにお返しをしたい。 ・皆さんによくしてもらった。素晴らしい働きだった。どの瞬間も楽しむことができた。本当に故郷のように感じられたので、日本を去りたくない。有難うございました。 ・(長崎)観光で感じたのは、スケジュールがタイトだったのであまりお土産を買えなかった。 ・グラバー園や原爆資料館ではとても慌ただしかったので2~3時間以上必要だった。 ・原爆資料館にもっと時間をかけた方がよかった。 ・病院見学の病棟ツアーでは看護師のシャドウイングの代わりに質問をしたかった。 ・異なる設備のシュミレーションラボで実際に学生がシュミレーションをしているところを見ることができた。 ・少し食べ物がたびたびで、実はちょっと飽きていた。もっと野菜があるとよかった。皆さん親切で食べ物は美味しかった。 				

※数値は人数

表3 学生ボランティアへのアンケート結果（一部抜粋）

n = 26

質問項目	回答
ボランティアに参加した理由	<ul style="list-style-type: none"> ・国際交流に興味があり、友達に誘われたため。 ・来月ウォッシュバン大学に行くため、話す機会を作りたいから。 ・元々英語が好きで、英語で話したいと思ったため。 ・外国の方と友達になりたいから。うまく話すのは無理だが、話すのは楽しいし、色んなことを知りたいから。 ・大学生のうちに色んな経験をしてみたかったから。
良かった点	<ul style="list-style-type: none"> ・タウンツアーを通して、看護の話だけでなく様々な会話が出来た。夕食を一緒に食べることで会話もはずみ、日本の文化も伝えることが出来た。 ・日本とアメリカの文化の違いなどを知ることが出来た。 ・タウンツアーを自分たちで計画できたこと。 ・身振り手振り、単語だけでもコミュニケーションが取れる事が分かった。 ・お好み焼きを食べに行き、学生さんたちの笑顔を見ることができてとても嬉しかった。
悪かった点	<ul style="list-style-type: none"> ・箸を使えるかどうかの把握が出来ておらず、前もって準備が必要だった。 ・ボランティアの情報掲示をもう少し早めにしてほしい。バイトのシフトを入れてしまっ行って行けないことが多い。 ・少しの発音の違いでも伝わらないし、日本特有の言い回しもありもどかしい場面がいくつもあった。 ・通訳がいるわけではなかったため、少し戸惑うこともあった。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・今回3日間ウォッシュバン大学の学生と接する機会があり、さらに来月ウォッシュバン大学での看護研修へ行けるようになって、仲良くなることができ、ボランティアをして本当に良かったと思った。 ・英語をもっと勉強したいと思った。 ・英語の知識を身につけるべきであった。 ・ウォッシュバン大学の学生が看護や医療のことで、福岡で何をしたいのかも知りたかった。 ・とてもよい勉強になった。よい影響を受けて新たな目標ができた。また機会があれば参加したい。 ・もっと英語を勉強して、来年こそは自分がウォッシュバン大学に行きたいと思った。 ・国際交流の期間がテスト期間や成人式とかぶっていて、ホストファミリーの受け入れや別の日のボランティアをすることができず残念だった。 ・ウォッシュバン大学への研修が現実味を帯びてきて、頑張ろうと思った。

研修へ参加するための心構えができたという点でも、学生にとって意味のある経験であったと言える。

3) ホストファミリーのアンケート結果（表4）

ホームステイを受け入れた理由として、「家族にとっても貴重な機会であり、よい経験になるから」「これまで外国人との交流がなかったから」などの回答があった。滞在期間については、「ちょうどよい」もしくは「短い」と回答していた。ホームステイを受け入れて良かった点については、「異文化に触れ、家族も見聞を広めることができた」「日本との暮らしの違いを聞くことができた」「コミュニケーションの大切さを学んだ」「英語を勉強する動機づけになった」等、研修生を受け入れたことで、家族もまた国際交流の楽しさを知り、お互いの国の文化や生活の違いを知ることによって他国の人々への理解を深めることができていた。

4) ウォッシュバン大学教員の感想

前年度の視察に来日していた教員2名が同行していたため、コミュニケーションは良好で教員間の交流も深まった。研修プログラムに対するウォッシュバン教員の満足度も高かったが、授業科目であるため、毎日振り返りのディスカッションができる時間が欲しいこ

と、研修時期が米国にとって飛行機代が最も高額になる時期であるため、宿泊費や飲食費等の実費をもう少し抑えて欲しいことが要望として挙げられた。長崎観光については、被爆地であることを知らなかったようだが、こちらが考えていた以上に興味関心を持ち、次回も研修プログラムとして組み込んで欲しいと要望された。

6. 「Nursing in Japan」における研修後の評価（表5）

「Nursing in Japan」における研修後の評価では、研修生が帰国後、授業内で振り返りを行った内容について記している。

研修後の評価の中で、研修生は、日本で経験した多くのことに満足し、今後の人生や看護についての視野が広がったこと、コミュニケーション能力が向上したことなどについて感想が語られていた。

なお、授業科目の評価はグループ・個人プレゼンテーション、レポート、グループディスカッション、振り返りの記録により行われる。内容の一部掲載に際して、資料を活用することについてウォッシュバン大学教員からの承諾を得た。

表4 ホストファミリーへのアンケート結果（一部抜粋）

n = 6

質問項目	回答
ホームステイを受け入れた理由	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームステイをする事によって娘に異文化慣習等、経験させたかった。 ・娘も国際交流等でホストファミリーにお世話になったので。 ・娘の強い希望により、また、私も子どもにとって非常に貴重な経験になると思った。 ・国際交流という意見では受け入れも同様に家族にとっても貴重な経験と考えた。家族全員が同じ空間で経験できる素晴らしいチャンスと考えたから。 ・これまでに外国人との交流がなかったから。
滞在期間について	<ul style="list-style-type: none"> ・「ちょうどよい」と回答したのは5名、「短い」と回答したのは1名であった。
ホームステイを受け入れて良かった点について	<ul style="list-style-type: none"> ・家族同様の2泊3日を過ごせた。 ・異文化に触れ、私たち家族も見聞を広めることができた。 ・カンザスの暮らしと日本の暮らしの違いについて生の声を聞いたこと、伝えたい事を家族で表情や身振り手振り、つたない英会話で会話が通じた時の喜び、海外に強い関心が持てたこと、コミュニケーションの大切さ等学びも多く、幸せな時間を過ごせたので受け入れをして良かった。 ・家族皆がコミュニケーションにチャレンジしている様子がいい経験になっていると思った。 ・実際に習慣や考え方の違いに触れられたこと。 ・自分と子どもたちに良い経験となった。英語を勉強する動機づけになった。
事前に欲しかった情報や要望について	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームステイする学生のプロフィール（個人情報に触れない程度）が事前に案内する方法をご検討してほしい。 ・研修生のプロフィールシートや日本に滞在中のスケジュールを頂いていたので私達は良かったが、研修生にホストファミリーの情報（家族は何人か等）を前もって知らせてあげた方が安心できると思う。 ・ホームステイ前後のスケジュールで、特に日本に来てから主催者準備の食事は何を用意したのか、市内近郊はどこを観光したのか等の情報（タウンツアー等）が事前に欲しかった。
その他、気づいた点や感想等	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームステイした学生と楽しい2泊3日間だった。素晴らしい思い出を頂き感謝申し上げます。 ・外出も多かったので少し疲れているのではないかと心配したが、体調も崩さず過ごしてくれたので安心した。娘も見習って頑張って学んで欲しいと思う。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。 ・今回我が家にステイされた学生も大変素晴らしい学生さんで、相互にいい時間が共有できたと思う。

表5 ウォッシュバン大学研修生による研修後の評価（英文を和訳し、一部抜粋）

n = 6

質問項目	回答
このプログラムに参加した動機は何ですか？	<ul style="list-style-type: none"> ・私が行ったことのない世界の地域をみたいと思った。 ・他国を理解するための国際的な経験を持つことができ、さらに異文化適応力を達成しながら自分の看護と人々の知識を広げるため。 ・自分自身の価値観と異なった文化を学び、私たちと異なった健康管理システムを見たかった。
予想通りでしたか？（何故？または何故だめだったか）	<ul style="list-style-type: none"> ・予想通りだった。日本の健康管理システムは、学ぶために素晴らしく、日本文化は熱中するほど面白くて、人々は親切で、食べ物は美味しかった。 ・同じ言語を話すことができない人たちがお互い影響し合って私の知識を広げてくれた。
このプログラムにおいて、あなたの将来に影響する重要なことがありましたか？もしあればどのようなものでしたか？	<ul style="list-style-type: none"> ・異なった方法はよりよい患者ケアを作り出すことが明らかとなった。私もまた、コミュニケーション方法の違いを理解する仕方を学んだ。 ・私自身の文化の違いの知識でより豊かになった気がする。
プログラムで最も良かったことは何ですか？	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームステイ。私のホストファミリーは、山や海に連れて行ってとても嬉しかった。 ・ウォッシュバン大学が授業料の半分のサポートしてくれたこと。
プログラムで最も良くなかったことは何ですか？	<ul style="list-style-type: none"> ・期間がとても短い。 ・あと少しショッピングや夕方ホテルに滞在する時間がほしい。最終日には疲れ果てた！
将来、他の学生にもこのプログラムを勧めますか？	<ul style="list-style-type: none"> 6名全員推奨すると回答。 ・まさに貴重な経験だった。生涯ずっと忘れられないこととなった。 ・この文化的経験は、すべての人がよい看護師やよい人間になるために必要だと思う。
どのような技術を伸ばしましたか？	<ul style="list-style-type: none"> ・私のコミュニケーションスキルは明らかによくなり、人との会話の広がりを学んだ。 ・コミュニケーション技術、プレゼンテーション技術。
この経験／旅行で前もって準備したほうが良いと思うことはありますか？	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームステイの情報をもっと欲しかった。私たちがそれぞれの家に行った時、多少ホームシックになった。もっと情報があって、心構えができていたらと思った。
この研修／経験で変革できたことは何ですか？	<ul style="list-style-type: none"> ・違う手法の健康管理をみて、標準的な私自身の実践について多くのことを考え、アメリカの健康管理の傾向に対する私の考えを方向付けること。 ・日本文化における考え方を知った。よりよいケア方法を学び、思いやりのある看護者になる。だって私たちは、日本でとても良いもてなしを受けたから。

課題・展望

今回の研修はウォッシュバン大学の研修生にとっても満足度が高く、相互交流の意義は大きかった。今後この研修を継続させるためにも、プログラム検討や双方の交流のあり方について課題を述べる。

1. ウォッシュバン大学側の研修目的を踏まえたプログラムの検討

今回実施した看護研修は、授業科目「Nursing in Japan」の教育目標が達成できるよう、プログラムの検討を行う必要があった。しかし、双方の国際交流委員間での事前調整段階では、「Nursing in Japan」に関する詳細な情報は十分に得られておらず、簡単な研修目的を共有した上での調整であった。本来であれば授業科目の教育目標などを踏まえた上でのプログラム検討が理想的であったが、教育目的や行動目標について具体的な情報を得たのは研修後であった。また、ウォッシュバン大学の教員より、研修生の研修後評価についても情報を得ることができた。今回の研修プログラムについて、新しく得た情報を踏まえ、当看護学科の国際交流委員間で振り返りを行った結果、以下のような課題が明確になった。

1) 研修スケジュールについて

今回の研修期間は10日間と短いものであり、研修期間中に連休も入ったため、研修を実施できたのは実質4日間であり、ハードスケジュールにならざるを得ない状況であった。特に時差が10時間あり、研修生の体調を考慮すると、研修内容の精選と日々のスケジュール構成に工夫が必要であると考えた。

2) 研修目的と研修プログラムの内容について

今回の研修において、研修後のアンケート結果や振り返りを見る限り、日本の医療や看護実践、医療動向や日本が抱える課題や取り組みについて学びを深めるといった点では、大学病院見学や施設見学は適切なプログラムであったのではないかと考える。しかし、日本の抱える高齢化問題や経済情勢の変化など、多様な社会背景や歴史について研修生がどこまで理解できたのかについては分からなかった。研修生がそのような社会背景や歴史を理解しつつ、今日の日本に求められている医療ニーズや医療・看護の実践を学ぶことができるよう、資料の提示や簡単な講義などを行った上で、大学病院・施設見学に臨むといった配慮も必要かもしれない。

また、日本における健康増進や疾病予防を学ぶためのプログラムについてはやや不足していたように思われた。例えば、大学病院見学や施設見学の他に、大学病院内のメディカルフィットネスセンター見学や市町村における健康増進や疾病予防についての取り組みを紹介するなど、研修目標が達成できるよう、今後検討

の余地があると考えた。

日本文化に適したコミュニケーションの実践については、学生ボランティアとの交流や、スピーチやプレゼンテーション、ホームステイでの体験を通してその成果が得られることが期待され、実際に自身のコミュニケーションやプレゼンテーション能力が向上したと評価をした学生が多かった。今後も継続し、よりよいプログラムとなるよう交流方法や内容の工夫を行う必要がある。

その他に、日本の文化・歴史について学ぶことを目的とした長崎観光では、研修生は長崎が被爆地であることを知り、長崎という地や、平和公園と原爆資料館について興味を持ち、「もっと見学する時間が欲しかった」という反応が多くあった。このことは予想外の反応であったが、他国の人々が日本の文化や歴史を知り、興味関心を持って貰えたことは、我々にとって非常に喜ばしいことであった。

おわりに

ウォッシュバン大学との国際交流は4年目を迎え、今回新たな試みとして当看護学科での看護研修が実現した。相互交流が開始したことで当看護学科における国際交流活動はますます進展していくことが予測される。今回の経験を踏まえ、研修内容の見直しや検討を行うだけでなく、当看護学科が行っている国際交流活動について広くアピールし、学生を中心とした国際交流活動メンバーの募集と組織化、予算の獲得、教員の語学力向上により一層力を入れていく必要がある。

引用文献

- 1) 文部科学省「国際交流政策懇談会最終報告書」平成23年3月。
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/_icsFiles/afieldfile/2011/04/21/1305175_01_4.pdf
- 2) 有田久美, 大城知子, 黒髪恵, 石橋曜子, 西村和美, 山下千波, 田中美加, 黒木求, 宮林郁子: 看護学科における国際交流活動の現状と課題－韓国啓明大学看護学部との国際交流－, 福岡大学医学紀要第40巻3/4号別冊: 219-226, 2013.
- 3) 有田久美, 大城知子, 石橋曜子, 田島康子, 宮林郁子, 黒木求: 看護学科における国際交流活動の現状と課題－第2報 米国ウォッシュバン大学看護学部との国際交流－, 福岡大学医学紀要第42巻1号: 189-196, 2015.

(平成28.4.9受付, 平成28.7.1受理)

「本論文内容に関する開示すべき著者の利益相反状態: なし」